江戸時代の中国語研究

――岡島冠山と荻生徂徠――

西原大輔

はじめに

明治以前の日本は、中国の書物を専ら漢文訓読法によって学んできた。しかし、十八世紀の前半には、岡島冠山（一六七四～一七二八）を中心として、唐話学が起こり、外国語としての中国語研究が行なわれ、唐話学習書が数多く出版された。荻生徂徠（一六六六～一七二八）は、漢文訓読法が既に一つの解釈になってしまっていると考え、和訓を廃し、中国語に依って古代の経典を読むべきだと主張した。徂徠の結成した訳社（一七一一～一七二四）は、実用の学にすぎなかった従来の唐話学を、「道」の学へと引き上げ、唐話学の原動力となったのである。岡島冠山は、その訳社の訳師であった。唐話学はその後衰退してしまうが、のちの文学等に大きな影響を与えた。唐話学は徂徠の訳社の主張と共に、近代へと繋がる歴史的意味を持っていると思われる。この小論では、岡島冠山の事蹟及び訳社における徂徠の主張について考察したい。

一、

江戸時代初期十七世紀の日本で、外国の文化に触れることができたのは、主に長崎と、黄檗宗の寺院であった。一六三七（寛永十四）年～一六三八（寛永十五）年の島原の乱のち、一六三九年（寛永十六年）にはポルトガル船の来航が禁止され、一六四一年（寛永十八）年に平戸のオランダ商館が

長崎の出島に移されると、貿易は長崎に集中した。そこでは長崎奉行のもと、世襲の職業として、オランダ通詞・唐通事が活躍することになる。

一方、黄檗宗の開祖隠元隆琦（一五九二～一六七三）は、一六四四（正保元）年の明朝の滅亡後、一六五四（承応三）年に日本へ渡り、一六六一（寛文元）年、宇治に万福寺を開いた。

山門を出れば日本ぞ茶摘み歌　菊舎

という俳句が、その異国情緒を伝えてくれる。また明の遺臣朱舜水は、一六五九（万治二）年に長崎に亡命し、一六六五（寛文五）年には徳川光圀の招きで江戸に赴いている。

このような情況を背景にして、唐話の学習が行なわれるようになってくる。雨森芳洲（一六六八～一七五五）は二十二才の時に唐話を習いはじめ、一六九二（元禄五）年と、一六九六（元禄九）年から一六九八（元禄十一）年の二回にわたって、唐話学習のため長崎まで出かけている。唐話学習が流行してくるこの時期は、浄厳（一六三九～一七〇二）の『悉曇三密鈔』（一六八二年）が万福寺で刊行されたり、契沖の『和字正濫鈔』（一六九五年）が出版されるなど、言語とその音声に対する関心が高まった時でもある。

従来は長崎の唐通事の間に家業として伝えられてきた唐話の知識を、広く読者に公開・提供したのが、以下に述べてゆく岡島冠山であるが、冠山はそれまでの唐話の流れを集約し、収斂させる位置にある。

二、

岡島冠山の事蹟については、資料が比較的乏しく、随筆なども書き残していないため、はっきりしない部分が多い。一六七四（延宝二）年、長崎に生まれた冠山は、一六九二（元禄五）年、唐稽古通事の時、長州藩主毛利吉就の訳士となった。しかし、訳士という職は、正式の儒学者より一段低く見られていた。

冠山始ハ譯士ヲ以テ萩候ニ仕ヘ其月俸ヲ受ク。自ラ賤役ヲ為スコトヲ慙テ辞シテ家居ス。[1]

冠山は実用のためだけの唐話には満足できなかったようだ。

一六九四（元禄七）年の吉就の死に伴って、冠山は長崎へ帰り、唐通事の職についた。しかし一七〇一（元禄十四）年には唐通事職を辞して長崎を離れ、一七〇五（宝永二）年には徐渭の「雲合奇蹤」を翻訳し、『通俗皇明英烈伝』として京で出版している。その後一七〇五年（宝永三）年江戸へ、一七〇七（宝永五）年には黄檗山、さらに大坂あたりに住んだ後、一七一〇（宝永七）年に、再び江戸に出てくることになる。数え年で三十八才の時のことである。

この江戸行きは、第六代将軍家宣（位一七〇九～一七一二）の即位にともなう正徳の朝鮮通信使とかかわりがあり、『先哲叢談』には、正徳元年（一七一一）の朝鮮使との富士山論争の一件を載せている。白頭山の中の金剛山を天下第一の山とし、富士山をとるにたらないとする「洪」「厳」という二人の書記に対し、冠山は、富士山こそ、人跡の到る所の少ない秘嶽であり、中国で日本のことを蓬莱と呼ぶのも、富士山あればこそだと言う。そして「朝鮮の金剛山が中国の文献に出てきますかな？」と問い返すと、

二書記言ナクシテ罷ム。

となったとある。『先哲叢談』では冠山の項の三分の一以上をさいてこの挿話が描かれており、冠山の得意の瞬間であったと思われる。

三、

朝鮮通信使が来ていたこの正徳元年は、唐話学にとっても意義のある年である。この年、荻正徂徠は訳社という研究会を組織し、唐話による中国の経典の講読を始めた。その訳社に唐話の教師＝訳師として招かれたのが、他ならぬ岡島冠山である。

訳社は一七一一（正徳元）年から一七二四（享保九）年まで足かけ十四年にわたって続いたが、ここでの講義をもとに、冠山は唐話の学習を公刊している。数多い唐話学習書のうち、最初に出版されたのが、唐話の入門書とも言うべき『唐話纂要』で、一七一六（享保元）年の出版である。訳社が開かれている間、冠山は多忙を極めていたが、一七二四（享保九）年に訳社が解散されると、冠山は京へ上り、唐話書を続々と刊行してゆく。

一七二五（享保十）年
『唐話類纂』成立
『字海便覧』刊
一七二六（享保十一）年
『唐訳便覧』刊
『唐音雅俗語類』刊

このような唐話の知識の広がりとともに、関心が高まって来たのは、従来の漢文訓読法では読めない明・清の白話小説であった。冠山は自ら『水滸伝』の一部を、日本で初めて訓をほどこして出版したが、一七二八（享保十三）年にこの『忠義水滸伝』が出版される前、同年一月二日に、冠山は五十五才で京に没した。

四、

岡島冠山の、唐話学と水滸伝訓点の二つの業蹟は、文学と言語との二つの分野で後世に影響を与えたと思われる。一七五七（宝暦七）年から一七九〇（寛政二）年にかけて、『水滸伝』の翻訳本『通俗忠義水滸伝』八十冊が、岡島冠山の名義で出版され、江戸後期の小説界に強い影響力を持った。数多い『水滸伝』の翻案物の他、滝沢馬琴（一六六七～一八四八）の『南総里見八犬伝』（一八一四～一八四二）や『椿説弓張月』（一八〇七～一八一一）は、英雄・豪傑が活躍する複雑な構想を『水滸伝』より得て、日本の『水滸伝』をめざしたものであると言える。

一方言語においては、冠山の唐話書の影響のもとに作られた『雑字類編』（一七八六年）は、その語彙が、最初の蘭日対訳辞書『ハルマ和解』（一七九六年）と共通するものが多いことが指摘されている。[2] 徂徠の訳社は一七一一年から一七二四年まで、冠山の死は一七二八年、そして、青木文蔵（一六九八～一七六九）・野呂元丈（一六九三～一七六一）が吉宗から蘭語を学ぶように命ぜられたのは一七四〇（元文五）年であった。が、唐話学と蘭学との繋がりは残念ながら今一つはっきりしない。

五、

さて、このような唐話学の原動力になったのが、荻生徂徠の訳社であった。もちろん中国語の教師は岡島冠山で、そこでは唐話の学習と中国の経典の訳読が行なわれた。訳社の結成と同じ正徳元年に刊行された『訳文筌蹄』の「題言」には、訳社に関する徂徠の主張がはっきりと述べられている。すなわち、古代の聖人の書を読むにあたって、後世の人の解釈を頼りにするのではなく、読書によって直接古人と対話すべきであり、そのためには、ある種の解釈になってしまっている漢文訓読法からなるべく離れ、中国語で直接原典を読むのがよいとする考え方である。以下、徂徠の考え方をみていくことにする。[3]

徂徠は、講釈ということに独自の考えを持っていた。

> 私は講釈が嫌いで、学問をする者にはつねづね講釈を聴くなと戒めている。[4]
>
> ただ、講釈が学生たちに少なからぬ害を及ぼすことを以前から深く知っているため、一片の老婆心から口を惜しまずに言うのであって、塾を開いて生計を立てる世間の儒者たちから憤慨されるのを顧慮しているひまはないのだ。[5]

徂徠はここで、学問の方法論を述べようとしているわけだが、講義によって経典を理解しようとするのは王道のように見えて、実はそうではないと言う。その講釈はどのようなものか

と言うに、

一字の解釈から一句の意味、一章の趣旨から一篇の大意、公認された注釈とそのほかの注、注釈の間の異同、さらには逸話やら美談、文章の来歴に至るまで、およそ本文と関係のあるものは手当り次第にかき集め、店でも開いたかのように並べ立て[6]、

という、一種の注釈学である。徂徠は、このような講釈には十の害があると言い、それを並べたてている。その対極として常に頭に置かれているのは、自分自身の目による「読書」である。

ここから次第に卑劣な心が生じ、耳を貴んで目を軽視し、読書をやめて聴講につとめ[7]、

そして自分では曾参ぐらいにはなれるに違いないと思いこみ、いずれは人々が西河の民のように自分を師匠の継承者ではないかと考えるだろうと思っている[8]。

中には傑物が現われても、ひとたび講学の店開きをすると、弊風にあおられ、目玉商品を出して買手を呼ぼうとするので、派閥ができてしまう[9]。

このような状態では、自分の目で読み、考えるという本来の「読書」は実現されないと徂徠は考えているようだ。では徂徠の言う「読書」とは何か。

『管子』には、「思え、思え、さらにかさねて思え。思って通じなければ、鬼神が通じさせてくれるであろう」とある[10]。

だから絶対に解説をしてやってはならないが、一方では疑問のある箇所をすぐ忘れてしまうことも許さない[11]。

つまり、直接経典に触れるべきであって、後世の人の解釈の助けを借りるなと言う。

だから胸中が広くて数多くの意味を包含でき、眼力が明らかで数多くの意味を見ぬいて隠れさせず、数多くの意味を混乱させず、前の文章を度忘れしない者でなければ、古文辞は絶対に読めない[12]。

このような読書観は、注釈の大系である朱子学とは相容れないのは当然である。そして、その注釈学の大系を支えているのが漢文訓読法であると徂徠は考えたようだ。

わが国の学者は日本語で中華の書を読み、和訓と称している。訓詁という意味から出た言葉であろうが、実際は訳である。しかし人々は、それが訳であることに気づかない[13]。

古人の書物は、訓読によって変質してしまうし、それが既に変質したものだと人々は気づかず、後世の人の手によって解釈された古典しか見ていないと言う。

だが、日本には日本の言葉があり、中華には中華の言葉があって、両者の体質がそもそも違うのだから、一致す

るはずがない。そこで和訓の語順を逆転させる読み方は、意味が通じたようではあるが、実はこじつけなのだ。[14]向うにある語彙がこちらにもあるとは限らず、こちらにも向うにない語彙がないわけではないことがわかる。[15]異字同訓および訓の的確でないもののうち、現代の言葉に移し換えれば、まだしも正しい訳が得られる場合もある。[16]

「訳」の一字は、読書の奥義である。[17]

まず長崎の学問（いわゆる唐話の学のこと）を勉強させ、中国の俗語を教え、中国語で読ませ、それを日本の俗語に訳させて、下から上へとよむ訓読は絶対にさせないことにした。[18]

私の見るところでは、介添えのついた盲人は多くが道を知らぬ。介添えのない者が、ひとりで歩けるようになる。これは道を歩く才能に差があるわけではない。読書も同じことだ。盲人は早く介添えをやめる必要があるし、読書では早く和訓から離れたい。これこそ真の読書法である。[19]

六、

徂徠はこのように考えて訳社を結成し、岡島冠山を招いて中国語を学んだのである。しかし、徂徠の意見を聞いてみると、中国語で読むということよりも、とにかく和訓の束縛から離れた相対的で自由な思考をすることの方に、より重点がおかれているように思われる。徂徠と冠山が共に一七二八年に没して以後、唐話学はさしたる発展をみせない。漢文訓読法では対応できなくなった白話文には、以後白話訓読法がおこなわれるようになって、中国語を学ばなければ読めないということはなくなってくる。唐話学における、異質な言語としての中国語の認識と、「訳」による外国語の理解は、むしろ蘭学、そして近代における外国語の翻訳へとつながってゆく系譜である。外国語を外国語として学ぶという方法が意識化される過程で中国語が果たした役割の大きさに、我々はもっと注目すべきではなかろうか。

注

（1）江戸時代の儒学者の逸話を集めた『先哲叢談後編』による。

（2）『国文学　解釈と鑑賞』昭和六十年三月号、岡田袈裟男、「蘭語・唐話・蘐園そして冠山――江戸言語学の地層」

（3）引用は全て『訳文筌蹄』の「題言」からであり、現代語訳は、中央公論社、日本の名著16、『荻生徂徠』によった。

(4) 予悪レ講。每戒学者。不レ聴二講説一。

(5) 祇深知下講説之害二諸生一不中小小甚稔。故一片婆心。不レ惜口業一。亦不レ暇レ顧二世儒下レ帷代レ耕者懐中忿恨上也。

(6) 字詁句意。章旨篇法。正義旁義。註家同異以及二故事佳話。文字来歴一。凡有レ関二孫于本文一者。叢然竝集。臚列如レ開レ肆。

(7) 由レ是漸生二卑劣心一。貴レ耳賤レ目。廃レ読務レ聴。

(8) 自謂假饒不レ得レ為二曾参一。必為二有若一。以為下他日西河民疑二吾夫子一之資上。

(9) 其間有二豪傑者一。一開二講肆一。弊風所レ扇。懸レ貨求レ售。門庭逐立。

(10) 管子曰。思レ之思レ之。又重思レ之思レ之而不レ通。鬼神将レ通レ之。

(11) 切勿二為レ其解説一。又不レ許二其輒忘一レ所レ疑。

(12) 故非二胸襟闊大。能含二容幾多義理一。眼力精明。能使下二幾多義理一不上レ致二隠匿一。能使下二幾多義理一不レ致二紊乱一。不上レ致二忽忘一者中。決不レ能レ読。

(13) 此方学者。以二方言一読レ書。号曰二和訓一。取二諸訓詁之義一。其実訳也。而人不レ知二其為一レ訳矣。

(14) 但此方自有二此方言語一。中華自有二中華言語一。体質本殊。由レ何吻合。是以和訓廻環之読。雖レ若レ可レ通。実為二牽強一。

(15) 則知下彼之所レ有。此不二必有一。此亦不上レ無二彼之所一レ無也。

(16) 異字同訓。及訓不二的確一者猶有四換以二今言一可三以正一其訳一焉。

(17) 訳之一字。為二読書真訣一。

(18) 先為二畸陽之学一。教以二俗語一。誦以二華音一。訳以二此方俚語一。絶不レ作二和訓廻環之読一。

(19) 予観二瞽有レ相者一。多不レ識レ路。其無レ相者。乃能自行。是豈其才為レ殊。読レ書亦爾。瞽要二早去一レ相。読レ書欲二速離一和訓一。此則真正読書法。